

# 風俗史から見た現代日本のキリスト教

井上章一

今、御紹介をいただきました井上と申します。キリスト教そのものの研究をしたことはありません。今日私がお話するのも、日本社会がこの宗教をどう受け止めてきたかという、そんな話です。

大阪ゲヴァントハウス合唱団というコーラスグループをご存知でしょうか。ミサ曲をよく歌うところです。ブラームスのドイツ・レクイエムだとか、バッハのマタイ受難曲なんかをレパートリーにしています。その合唱団が、浄土真宗の親鸞をことほぐ750回忌に、「本願力にあいぬれば」というCDを発表致しました。ちょっと聴いてもらっていいでしょうか。出だしです。作曲者は平田聖子で、親鸞の和讃に曲を添えています。キリスト教の宗教曲みたいに、聴こえますよね。

でも、賛美歌ではありません。賛仏歌です。本願寺教団の宗教曲です。ではありますが、機能和声に従った西洋流の音楽になっています。面白いのは、南無阿弥陀仏を唱えるところです。そこがアーメンと同じ音になっています。なむあみだーぶーのトップノートが※ファ、ミーというふうですね。浄土真宗の音楽が、キリスト教のミサ曲と同じようにこしらえられているのです。少なくとも、メロディーとハーモニーはそうになっています。歌の言葉自体は親鸞上人の言葉ですが、音楽はミサ曲になっています。

浄土真宗は19世紀の終わりに仏教唱歌を作り始めました。これは賛美歌を手本にしています。そして20世紀の10年代に、今紹介したような賛仏歌を作り始めたのです。浄土真宗はキリスト教にあやかって音楽を作ったのだということが、読み取れるかと思います。天台宗や真言宗はこんな楽曲を作っていません。比叡山以来の伝統にしたがい、声明を唱え続けています。西洋流の機能和声には、したがっていません。論証はできませんが、私は薄々こう感じています。本願寺教団の音楽がキリスト教風になってしまったので、そことの差別化をはかったのだらう。天台や真言は、浄土真宗への対抗心もあって、自分たちの伝統に強いこだわりを示すようになったのではないかと。

次に建築の話をお話します。京都の西本願寺が龍谷大学という大学を運営しています。仏教系の学校です。西本願寺には唐門というのがあって、これは国宝なんですが、そのすぐそばに龍谷大学の本館——重要文化財です——があります。1879年、明治12年にできた龍谷大

学の学舎です。行かれたことのある方はあまりいらっしゃらないかもしれませんね。いわゆる洋風建築です。正式な西洋建築を知らない京都の大工が拵えたのだとされています。どこか見よう見まねだなというところが残っていますしね。ですが明治初期のそういう遺構としては、かなり折目正しい洋風建築になってもあります。中には、いやそんなに侮ったものじゃない、きちんとしたアーキテクトが設計に関わったのじゃないかという人もいます。まあ、今のところそういう専門家が関わったという証拠はありません。いずれにせよですね、私も若い頃に訪れたことがあります。驚いたのは、その2階です。どう見ても教会です。正面の祭壇に仏壇が置いてあることを除けば、あそこに十字架があれば教会です。一種のギミックチャーチのようなものを、私は西本願寺の龍谷大学本館に感じました。

京都に残っている洋風建築では、これが最古のもので、つまり京都では西本願寺が、早くから西洋化へ舵を切っていたわけですね。キリスト教建築の受容という点でも他に先駆けていたように、私は感じております。後で同志社大学に西洋風のチャペルが出来て、キャンパスが西洋風に整い出します。でもそれはもう少し後です。龍谷大より遅れます。

東京の方は、西本願寺といえば、築地の本願寺をごらんになったことがあるかと思えます。あそこに巨大なパイプオルガンが置いてありますね。何のためにあんなものが要るんだと思われた方も、いらっしゃるかもしれません。先ほど紹介させていただいた賛仏歌などを演奏するために、あのパイプオルガンはあるわけです。音楽と建築に目を向ければ、西本願寺はキリスト教の後を追いかけた宗派だと言えそうです。ただ残念ながら、このことを日本の仏教学はあまり研究しようとしません。そして日本のキリスト教研究者もこのことに興味を持ってくれません。私のような人間が面白いなと思っているだけなんです。

明治新政府は一応キリスト教を受け入れたことになっています。ですが喜んで受け入れたわけではありません。これはもう渋々受容したとしかいいようがありません。欧米との外交関係を保つために、心ならずも許したわけです。明治の官僚達、政治家達ですが、本当はキリスト教なんか日本に入れたくなかったんですね。そんな政府中枢の想いは本願寺への期待に繋がりました。本願寺はキリスト教を食い止める防波堤になってくれる宗派だと、当局から期待をかけられたのです。そのせいでしょう。浄土真宗はキリスト教を一所懸命に勉強しました。その結果……この学校でこんな言い方は失礼ですが……ミイラ取りがミイラになってしまったような部分があるんじゃないでしょうか。キリスト教をミイラ呼ばわりしてごめんなさいね。

本願寺の島地黙雷という偉い坊さんは、勉強の果てに、親鸞は日本のマルティン・ルターだと言い出します。建築や音楽と同じですね。キリスト教の改革者に自分たちの師祖をなぞらえたわけです。京都の東本願寺、西本願寺に行かれるとおわかりだと思いますが、境内には鳩がいっぱいいます。私はあの鳩がいっぱい寄ってくる場所も、ヨーロッパの教会を真似たんじゃないかと思っています。

私は1990年代に、神戸女学院というプロテスタントの女子大で、非常勤講師を2年間勤

めました。授業を常時聴いてくださったのは、30人位の生徒さんたちでした。その中に、お父さんはお寺のお坊さんだという方が二人いたんですよ。私は、最初いぶかしく感じました。あなたたちのお父さんはプロテスタントの学校に行くことを嫌がらなかったのかと、そう私は尋ねました。二人ともこう答えてくれました。「いいえ、むしろ父にすすめられたんです。いい学校に入れたと両親もよろこんでいます」。その後で私は、関西のお寺が娘をしばしばミッションスクールに入れることを知りました。この点は、本願寺も真言宗も浄土宗も変わりません。皆ミッション系の学校に入れたがります。こんな言い方はいやらしいけども、申し上げます。娘の、お嬢さんとしての値打ちをつり上げてくれるのはミッション系だと、彼らは考えているのです。仏教系の学校はお嬢さんとしての値打ちを、あまり上げてくれないと思っているのです。残念ながら、というのはまあ変な話なんですが、寺の跡を継いでくれる息子は仏教系の学校に入れます。坊主としてのトレーニングをしてもらわないと困るわけですから。僧侶の資格を取らせるために仏教系の学校に入れます。でも跡継ぎでない娘は、ミッション系、クリスチヤンの学校にいたがります。京都の裏千家やらをはじめとするお家元達もだいたいそうです。本当やったら禅寺に入れるべきやと思わないでもないですが、みんなミッション系に、しかも同志社に入れたがります。私は首都圏の事情を知りません。東京のお坊さんが娘さん達をどんな学校に入れたがるのかを知らないのですが、たぶん同じような状況にあるんじゃないかなと感じています。

私は京都女子大学の非常勤講師も勤めたことがあります。女子大の話ばかりしてるからといって、疑わんといて下さいね。共学の学校にも結構行っていますから。京都女子大は西本願寺の学校、仏教系の学校です。生徒さんに聞いたんですが、学校では宣教師のお嬢さんを一人も見ないそうです。おわかりでしょうか。日本の坊主は娘をクリスチヤンの学校に入れたがります。だけどクリスチヤンの聖職者は娘を仏教の学校に入れたがりません。一方通行だと思います。半透膜でもあるのでしょうか。こういうことも教育学が研究すべきだと思うのですが、アホらしいと思われるんでしょうね、誰も調べません。本願寺は自分の音楽をミサ曲のようにしたと、さきほど申し上げました。ですが、日本に来ている教会で、自分のところの宗教音楽を天台声明風にしようとするところはないと思います。親鸞を日本のマルティン・ルターだと言う仏教者はいますね。でも、マルティン・ルターをドイツの親鸞だというプロテスタントはいないんじゃないでしょうか。いろんなところに一方通行を感じます。

京都女子大で教えられた学生間の裏話を、ひとつ披露いたしましょう。京女の生徒さんたちは自分たちのことを3Bだとよく言っていました。こういう場所で言うのは憚られるんですが、あえて言います。3BはB音で始まる三要素、貧乏・不細工・仏教を指します。その要素が自分たちにあるという自嘲をよくします。自虐ネタですね。いっぽう、同志社女子はプロテスタントの学校です。そして京女の生徒たちは同志社女子のことを3Kとよく呼びます。金持ち・かわいい・キリスト教というふうですね。金持ち・きれい・キリスト教と言う人

もいます。あの子達は羨ましいとよく彼女達は言います。断っておきますが、京都女子大学は決して悪い学校ではありません。地元では評判のよい学校です。就職もいいところに行っています。関西の企業からは「ああ、京女の子なら安心してうちへ来てもらえる」と言われる学校になりおおせています。それにも関わらず生徒さん達は、どうせ私らは3Bやという言うのです。

3つのBのうちの貧乏にこだわります。私は、むしろ京都ではお寺の方が、宣教師たちより金を持っていると思います。特に拝観料収入で潤っている観光寺院なんかは。いやらしい話ですが、お金で潤っているお寺のことを京都では肉の山、肉山にくざんと呼ぶんですよ。あまり収入がない寺を骨の山、骨山こつざんといいます。骨肉の争いとはこのことだという笑い話を、よく聞きます。私の知っている真言宗のあるお坊さんはこんなことを言うてました。息子が泣く泣く寺を嗣いでくれた。最初のうちは、坊主になるのが嫌やと言いよる。そやし、しゃあないなと思って息子にベンツを買ってやった。これでやっと寺を嗣いでくれるようになった。息子にベンツを買ってやれるような寺が京都にはけっこうある。私は聞きながら、思いました。ベンツを与えられて渋谷坊主になった奴にお経を読んでもらいたくないな、と。だから、どうせ私らは3B、仏教＝貧乏という話に、私はあまりリアリティーを感じないのです。だけれども彼女達は3B、貧乏とよく言います。

もうひとつの、これはもっと言いにくい話ですが、かわいいか不細工かという問題に移りましょう。もちろん、こんなのは比べることができません。実証的に論じるのは不可能です。ですが、ひとつ面白いデータがあるので、それを紹介します。2007年に朝日新聞社が出版した大学ランキングの本がそれです。この中に、女性ファッション誌へ学生の登場する大学別回数ランキング表が載っています。CanCam、JJ、ViVi、Ray、この4誌に各大学の学生はどれだけ登場しているかというのを比べた一覧表です。圧倒的に首都圏の学校が多いので、関西の学校はあんまりでできません。まあそれはメディアが東京に集中している以上しょうがないのしょうね。ベスト10を申し上げます。青山、立教、早稲田、慶応、神戸松蔭、学習院、日大、神戸女学院、甲南女子大、恵泉女学園。関西のベスト3はみなミッション系です。東京でも青山、立教がトップでした。青山は2007年の統計で795人が読者モデルになっていたそうです。別嬪さんの宝庫やなと思われそうなデータですね。神戸女学院が195人でした。大学の規模を考えればこの数字はやはり大きいと思います。そして2007年、西本願寺が経営する京都女子大からはたった4人しか選ばれていませんでした。このことだけからミッション系に美人が多いと私は言いません。仏教は不細工だとも。もちろんそんなことは口が裂けても言いませんが……まあ事実上言ってるのかな……だけど京女のお嬢さん達がどうせ私達は3Bよと、自分たちを蔑む気分はまあわからなくもないんです。

明治時代、大正時代に大日本帝国の女子教育は良妻賢母主義をモットーとしたとよく言います。良き母、良き妻を育てるための学校が戦前の女子大、女学校だった、国家がそれを女子に求めたとよく言います。確かにそうだと思います。けれど私は思うんですよ。男達は、

良妻賢母教育を受けた女学生にあんまり魅力を感じなかったんじゃないかなって。明治大正期の男社会が良妻賢母主義を押しつけたんだけれども、押しつける一方で、彼らじたいは、そんな女学生にあんまりそそられていないような気がします。心をときめかせたのは良妻賢母教育をあまり受けなかった学校、つまりミッション系の学校だったのではないかなと思います。というのは、日本文学史をざっとながめて感じるんですよ。『蒲団』の田山花袋がふらっとするのは、神戸女学院を出た女性です。まあ結局同志社出の奴に取られるんですけどもね。島崎藤村もそうでした。徳富蘆花もそうです。石坂洋次郎が「若い人」で描いたのもそういう女の子です。日本近代文学史に男を誘惑する、男を惑わす都会のお嬢さんとして出てくるのは、みんなとは言いませんが、キリスト教のもとで勉強をしたお嬢さん達なんです。近代日本の文学者達はそういう女の子として、仏教系の女の子を取り上げなかったんです。良妻賢母も取り上げませんでした。この延長上に CanCam、JJ もあると私は見たいのです。日本近代文学史上の誘惑するミッション系女子像には、社会学者の佐藤八寿子さんが、言及しておられます。いいお仕事だと思いますが、ざんねんながら後につづく研究者はいません。やはり、こういうとりくみを、アカデミズムは軽んじるのでしょうか。

現在私は 60 歳です。27 歳の時に結婚をいたしました。1989 年でした。恥ずかしながら、白いタキシードを羽織りました。嫁はんもウェディングドレスでした。ですが、婚礼の固めを行ったのは神社で、神主に三三九度をやって貰いました。神式結婚をしたわけです。結婚の風俗史を見ると、20 世紀の半ばまでは、自宅で行う無宗教式というのが多かったように思います。神社式は明治時代に始まっているのですが、すぐには普及しなかったと思います。普及するのは戦後です。しかも割と上の階級から広がっていったと思います。ものの本によると、日比谷大神宮で大正天皇が皇太子の時に結婚されたのが引き金になっているそうです。いずれにしろ、20 世紀半ば過ぎには神社式の婚礼が普及しました。私もその流れの中にいたのだと思います。ところが 20 世紀の 70 年代頃からキリスト教の形をとった婚礼が増えました。戦前からあったらしいですけど、20 世紀前半のそれは細々としかおこなわれていなかったと思います。1960 年に、これは割と有名な話なんですけど、軽井沢の聖パウロ教会が一般の、信者でない人の結婚式も受け入れるようになりました。古い話で恐縮ですが、1972 年に西郷輝彦と辺見マリがそこで結婚式をあげたんです。これがメディアで大きく報道されて、ああ教会で結婚式ができるんだということを多くの善男善女が知ったと思います。ここから雪崩をうったように日本人も教会へ傾いていきます。神田正輝と松田聖子が結婚式をあげたのは確か目黒のサレジオ教会だったと思います。どこの教会に行ったら割と手軽に引き受けてくれるか、この教会は信者でない者の婚礼も引き受けてくれる、この教会は辛気くさくて式前に 4 週間ほど聖書を読まなあかん、というような情報が女性誌に載りだしました。遂には、20 世紀の終わり頃からだったと思いますが、多くのホテルが自前でチャペルを構えるようになりました。ホテルでやられているチャペルの結婚式に、宗教としてのキリスト教は何の関係もないと思います。バチカンにとってみれば、あれはコスプレ

でしかありません。プロテスタントの方にとっても、あれはまがいものだと思います。アメリカにも、ああいうなんちゃってチャペルがありますよ。ですがアメリカだと、ホテルのチャペルはほぼラスベガスに集中していると言いきれます。その延長上で事態を考えれば、わが日本民族は日本列島全域をラスベガスにしていることになるわけです。そのことの意味を誰か宗教研究者は……まあこれも考えへんやろ、たぶんどうでもええことやと思われてるんでしょうね。話をもどしますが、チャペルへのこだわりをいただくのは女の人やね。男の子が教会風にこだわっているわけではないと思います。女の子が念じるわけです。——スタンドグラスや十字架があるところで結婚式をやりたい、ヴァージンロードを歩きたい、神父さんの前でエンゲージリングを交換したい。別に本物の神父かどうかはどうでもええ、欧米系の顔さえそこにあればそれでいいと。20世紀の後半から20世紀の末、そして21世紀にかけて蕩々とそういう方向でわれわれの結婚式は推移してきたと思います。1970年頃からその兆しはあったと思いますね。覚えておられるでしょうか、フォークソングの吉田拓郎に、僕の髪が肩まで伸びたら、結婚しようよ、街の教会でという歌がありました。70年代くらいから結婚式をやらせてくれる街の教会があったんやなということかもしれません。「てんと虫のサンバ」もそんな歌詞になっていたと思います。結婚式市場で神社の占める役割はどんどん落ちていきました。今のホテルは施設内に擬似チャペルを設けていますが、わざわざ擬似神社を作るところはあまりないでしょう。欧米からの留学生に神父のギミックをアルバイトで演じてもらうホテルはふえています。ですが、神主や巫女のギミック担当者を手配してくれるホテルは、あまりないんじゃないかな。この頃は、神社の境内に擬似チャペルを設けるところが出てきました。ほんまかいなと思われるでしょうが、奈良の橿原神宮も境内にえらくモダンなチャペルをもうけていました。これは何やねんと神主に聞きましたよ。もうこの頃の若い人はこういうところでないで結婚式をやりたがらないからという返事が、かえってきました。それは擬似チャペルですから、つまりキリスト教の信仰には加担していませんから、橿原神宮の信仰そのものは傷ついていないのかもしれませんが、いないのかもしれませんが、何やせつない話やなと感じたものです。昔はキリスト教信者の娘さんが——教会で結婚式をやる資格は当然あるわけですよ——信者の方が教会で結婚式をやりたと言った場合でも、親戚筋の反対で、それはやめろと言われることが、ありました。教会なんて……ごめんなさいね、こんな言い方……耶蘇教のところで結婚なんて勘弁してくれという親戚筋の反対で潰れることはよくあったのです。今は逆です。今は信仰とは関係無い人でも、仮にお嬢ちゃんが神社にこだわってやると言った時に、親戚から、違和感をもたれかねない時代になっているわけです。え、チャペルと違うんかってね。

日本のキリスト教研究は、日本におけるキリスト教受容をすごく消極的に語ってきたと思います。たとえば、日本はキリスト教を捻じ曲げながら受け入れているなんて言い方がよくなされます。私は聞く度に思うのです。何言うてんのや、ヨーロッパかてシナイ半島のキリスト教を捻じ曲げるとるやないか。もう一つ思います。日本の仏教界は、仏教をインドの仏教

とは似ても似つかん宗教にしとるやないか。日本が仏教を捻じ曲げた、その度合いを思うたら、キリスト教に対する捩じ曲げ方なんてかわいいもんや。そう思うのですが、そういう見方に立ってくれるキリスト教研究者はあまりいらっしゃいません。いらっしゃらないような気がしています。日本ではキリスト教の信仰は拡がらなかったとよく言われます。確かに拡がっていません。韓国は半数近い人がクリスチャンになっていると聞きますが、日本ではたぶん1%に満たないと思います。まあでもね、ほんまの意味の仏教信者だって1%に満たないですよ。だいたい、寺の坊主自体に仏教を信仰しているとはとても思えんようなところがようある。……ごめんなさい、今のは忘れて下さい、ちょっとフライングでした。……信仰にこだわれば確かに1%に満たないのかもしれませんが。しかし江戸時代には淫祠邪教だと思われていたわけですよ、キリスト教は。信じてはいけない、いや関心をよせてもいけない宗教だとされていたわけです。それが百数十年間で皆に、信仰心はともかく風俗面では、憧れられる宗教になっているわけですよ。お寺も、娘をミッションスクールに送りたがる。ミッションスクールは良い学校や……これもホンマは言葉を慎まなあかんのやけど……美人も多い学校やと、そうみなされるようになっていくわけですよ。結婚式が国民的な勢いでキリスト教風になりだしたこともそのひとつでしょうね。まあ確かにそんな話は、キリスト教の本質と何の関りもないのかもしれませんが。表面的な風俗現象でしかないのだと思います。信仰にこだわる人はそこに戸惑われるでしょう。ですが、風俗がキリスト教の方に向かいだしていることは侮れないと思います。そもそも、私たちがなびく風俗は仏教のそれではないんですよ。仏教には向かわない。神社神道の方にも向かっていないんです。ですが、キリスト教の方に、少なくとも表面的な形は向かっているんですよ。このことの意味はきちんと考えなければいけないと私は思うのですが、残念ながら日本の大学にそういうことを考える講座はありません。大学の研究は、みんな思想に向かいます。宗教や信仰に向かいます。まあ私ひとりでもええから、風俗史でやろうと思っているんですが。

さきほど、かつては信仰心があっても教会での結婚式を阻まれた人がいるというお話をしました。しかし、日本社会が阻むという点では、葬式の方がもっと強かったかもしれません。ごく最近までそういう状態は続いたと思います。キリスト教の信者の方が亡くなって、教会風の葬式をやりたいと遺族が思う。だけど、それは困る、どうしても仏教風にやってもらいたいという親戚の声で、仏教風を余儀なくされるということはよくありました。ひょっとしたら、今でもあるかもしれません。ただこの葬式という場でも、私はキリスト教化が進んでいるような気がしています。かつての宮型霊柩車を思い浮かべて下さい。いちおう自動車なんだけど、後ろの方が岸和田のだんじりみたいになっている自動車です。これは1920年代に大阪の「<sup>がごとも</sup>駕友」という葬儀屋が考え出した車です。「駕友」の鈴木勇太郎という人がアメリカに行って、後ろがごてごて飾られた霊柩車を見て、あんなのを作ろうと考え出しました。彼の自叙伝にはこう書いてあります。アメリカで後ろを飾った霊柩車を見るんですけども、耶蘇教式のものには日本に馴染まず、結局、和風の宮型を作ったと書いてあるんで

す。あの宮型、御神輿風の霊柩車は耶蘇教風を斥けた車だったんです。しかし、そんな宮型霊柩車は1990代に入ってほぼ絶滅しました。今東京ではまず見ないと思います。京都や大阪でも同じです。大阪の国立民族学博物館は、遂に宮型霊柩車を収蔵庫へ収めました。宮型霊柩車はホンマに博物館入りしたんです。今、都会地を走っている霊柩車は、鈴木勇太郎の「駕友」的な1920年代の価値観に立てば、皆耶蘇教式の霊柩車です。鈴木がこだわった御神輿風はもう潰え去りました。今葬式で増えているのは無宗教ですね。坊主には来ていません、あんなやつらの読経は聞きたくないという葬式が増えています。そういう葬式に出てみると、一応無宗教ですが、献花の仕方を見ると、ああキリスト教風だなと思うことがままあります。私は結婚式、婚礼のみならず、葬式という場でもこの傾向は進んでいると思います。

今日、日本のカップルはデートのクライマックスをクリスマス・イヴに置いています。これは1970年あたりからでしょうか。今現在の話をしますが、自分の彼氏が合コンで自分以外の女の子に会っているという状況を受け入れる優しい女の子はいると思います。彼が言い訳をするんですね。ごめん、合コンがあったんやけど、男の数が一人足らへんかったんや。友達に言われて、しょうがなく俺も行ったんや。けしておまえ以外の女に気持ちを移しているわけやない……という言い訳を受け入れてくれる女の子はいらっしやると思います。思いますが、クリスマス・イヴの日に自分以外の女の子とデートをした男の子が受け入れられることはまずないと思います。どうしてでしょうか。クリスマス・イヴが誰を本命にしているかの判るリトマス試験紙になっているからです。まあ、クリスマス・イヴ自体はそれこそキリスト教と本質的に関係がないのかもしれませんが、ですが、私は、どうして祇園祭の晩ではなくクリスマス・イヴなのかと問いたくなります。こちらの人に祇園祭と言うてもピンときてもらえへんかもしれませんね。大阪やったら、天神祭の晩でなくてなんでクリスマス・イヴなのか。こっちやったら何祭りでしょうか、三社祭ですか、ちょっとわからないのでご自分なりに関東風の祭礼へ翻訳をしながら聞いてやって下さい。

仮説的なことを申し上げますが、私はどうも近現代日本のジェンダーの問題と日本社会のキリスト教の問題とはどこかで関わっているように思います。今これをちゃんと解きほぐす用意が私にはありません。ありませんので、断片的な話をお伝えするだけで終わってしまうのですが、まあいずれきちんと考えたいと思っていますね。

私は日本におけるキリスト教研究は、マゾっ気が強すぎると思うんです。キリスト教の、少なくとも風俗面の、あるいは良い宗教として認められていることの、このサクセス・ストーリーへの目配りがあまりに無さすぎるんじゃないだろうかと思います。弾圧された、捻じ曲げられた、全然信仰は拡がらんという否定面ばかりを言いつのる。まあ確かにそうなんです、こんな言い方を聞かれませんか。「あの人はクリスチャンやのに浮気をしたはる」「あの人はクリスチャンやのに万引きをしはった」。こういう悪口はあり得ますよね。だけど、「あの人は浄土真宗やのに浮気をしたはる」なんて誰が言いますか。「あの人は真言宗やのに

万引きをしはった」なんて言う人がいますか。答えは明らかです。われわれは浄土真宗や真言宗に何の倫理的な期待も抱いていないんです。クリスチャンには抱いているんですよ。つまりそれだけ良い宗教だと思っているんです。かつては淫祠邪教だったんですよ。淫祠邪教が良い宗教になった、なりおおせたことの意味も本当は考えて欲しいと思います。捻じ曲げられた、弾圧されたというの、確かにそのとおりなんですけれどもね。

もうずいぶん前なんですけれども、話が飛んで申し訳ないんですけれども、幕末にアメリカからハリスという外交官がやってきて、幕府に女の人を要求するんですよ。まあ、下交渉をするのは部下のヒューズケンですが、幕府がさし出したのは唐人お吉といわれる人で、名目はナースなんだけれども、まあ慰安婦とは言わんですけど、そういう目的で出向くわけです。だけどハリス研究者の坂田精一先生は、お吉の話をも根も葉もないことだというふうに断言しました。実証的にそうつきとめたわけではありません。こんなことを平凡社東洋文庫の解説で書いておられます。ハリスはクリスチャンだ。東洋の好色な男とは違う。そんな要求をするはずがない。なんというピュアな期待でしょうか。クリスチャンがそんな邪な要求をするはずがないと。邪な要求をするクリスチャンも、現実にはいっぱいいるじゃないですか。でも現代日本の知識階級はキリスト教を清浄な宗教として受け取ったのです。私は、この点にこそ近現代日本におけるキリスト教受容の歪みが有ると思います。クリスチャンにも、いいかげんな奴はいっぱいおると考えない。クリスチャンは浮気をしないと捉えてしまったところに、大きな歪みがあったのではないのでしょうか。これ、相当失礼なこと言うてるのかもしれませんが、私はそう考えます。

私は10年ほど前にブラジルのリオデジャネイロに行きました。3ヶ月ほどそこで暮らしました。リオデジャネイロ州立大学の生徒さん達に日本文化を教えるという仕事で行ったんです。その時に宗教のこともかなり語り合いました。非常に印象深かったやりとりがあります。私は尋ねたんです。あなたたちが何か悪いことをしたと仮定しよう。その時に罪深いと感じる気持ちと世間に対して恥ずかしいと感じる気持ちを比べた場合、どちらの方が強いのか。そう数十人の生徒さんに尋ねました。ほぼ全員が世間の方を怖いと言っていました。えっ、君らカソリックと違うの、信仰心は無いのかと聞くと、あんまりないという子もいましたが、毎週教会に行っているという子も、世間のほうを怖いと言う。「私は結構信仰しています。ですから神様に対して申し訳ない、罪深いと思うこともあるけれども、この気持ちは日曜日に教会へ行けばなくなります。だけど、世間は日曜日になっても忘れてくれません。5年でも10年でも覚えています。だから世間の方がよほど怖い」。そう言われました。日曜日に教会へ行ったら罪の意識がなくなる、と言いきれるのは、信仰心が厚いからですよ。日本のクリスチャンは、日曜日に教会へ行っても罪の意識がなかなか拭えません。それは神へすがりきれていないからじゃないでしょうか。神の前でおのれをむなしくせず、自問自答をし続けているからじゃないでしょうか。私は今まちがったことを言っている可能性もあるのですが、あえて言います。「日曜日に教会へ行けば罪の意識が無くなる」というキリス

ト教観は、日本人の中にない。私はそのことも問題にしたいんですよ。そういう面は日本にほとんど伝わらなかったんじゃないでしょうか。私は中学、高校とカソリックの学校に行っていました。けれども、悪いことしても教会に行ったら気持ちがはれるというふうに教わったことはありません。日本のキリスト教受容には、やはり妙な倫理的歪曲があったと思いますね。そして、何がその歪曲をもたらしたのかというようなことも、ほんまは考えてみたいなどと思ってます。

というところで、質問の時間はたぶん4-5分しか残っていないと思いますが、私の言いたいことは終わります。どうもご静聴ありがとうございました。

質問者 A：先生はキリスト教校では良妻賢母教育を行ってないとおっしゃったんですけど、私は小・中・高と、神戸の海星女子学院という3Kの学校に行っておりました。それでICUに入ってきたんですけど、海星女子学院では良妻賢母教育は行われていました。そやけど、なんやねんと思ってました。何でか言うたら、当時は良妻賢母になるためには勉強なんかせんでもええっていう……。

井 上：はあ、不勉強の正当化ですか。違う理屈にしとるんですね。

質問者 A：一種違う理屈ですもん。そやけど私は一生懸命勉強したからずっと級長でした。それが重たくて重たくて、ICUの入試を理由に卒業式に出ませんでした。そやから、キリスト教側も日本化っていうことを考えているんです。

井 上：わかりました。そこは私の早とちりでした。ただ、日本近代文学は、良妻賢母をモットーとした学校の女生徒よりも、ミッション系のお嬢さん達にときめくことを描いてきたと思います。

質問者 A：そやから反抗はロックの歌詞とかにして、それで学校やめさせられた子が沢山います。弾圧も大きければ大きい程反発も大きいんです。ものすごく派手できれいでかわいい子は沢山いました。その子らは「11 p.m.」のカバーガールになりました。

井 上：つまり本来ならもっときれいな子は多かったということですね。

質問者 A：そうなんです。

質問者 B：先生のお話を聞いていて、僕は高校性の頃でしょうか、キリスト教と言うと愛の宗教という思いが当時の僕には強くて、愛の宗教を信じているアメリカ人がなぜベトナム戦争を長期間にわたってやっているのかが不思議でしょうがなかったですね。単純な疑問でして、すみませんが、よろしく解説お願い致します。

井 上：宗教が教義として考えていることと、民族や国家が何をやるかというのはまた別の話ですね。国家になってしまうと人間の上品な部分がどんどんそぎ落とされてしまうところがあるように私は感じています。仏教は比較的平和な宗教だと思わ

れていますよね。ヨーロッパやアメリカでもそういうふう考えられているのですが、そんな仏教でも、アシヨカ王の軍事力がなければ広がらなかったと思います。戦国時代の一向宗は、武装集団を組織しました。そこは皆、似たり寄ったり。大なり小なりそういう側面はある。だから戦闘的なのはイスラムだけじゃないと思いますね。皆そういう部分を持っていると私は思っています。

質問者 C：井上先生のお話は河野健二さんが西洋主義とおっしゃっていたものの風俗版を捉えていらっしゃるんだと受けとめました。明治以降の近代日本では、男女が生活上不平等で、女性は西洋の理想に自分たちの精神的支えを求めていたし、今も求め続けているということではないかと思えます。それで質問は、ちょっと古くなるんですけども、奈良時代とか飛鳥時代には、仏教は今のキリスト教のように、なんというんでしょうかね、すてきだったんじゃないかを感じるんです。私等は仏教の内日本で主流に流れてきた大乘仏教を仏教と呼んで、インド産の仏教を古仏教と呼んでいるんですが、仏教はもともとインドの古仏教とずいぶん違うもので、オリエント世界のキリスト教とかゾロアスター教のような古代宗教に接触して、もともとの仏教はその一部を取り入れているんじゃないかと思うんですが、その点についてどうお考えでしょうか。

井上：私は河野健二を直に知っています。話をしたこともあります。今、突然その名前を聞かせていただき、懐かしいなあと思いました。ありがとうございます。ただ、例えば洋服になるのはおっさんの方が早かったわけです。女の人はのちのちまで和服を着る。その意味で風俗の西洋化は男の方が早かったんですね。ところが下着に関しては男たちも遅くまで伝統を保ちます。禪を維持しました。女の人がズロースをはきだすほうが男のパンツ装着より早かったわけです。つまり目に見えるところの西洋化はおっさんの方が早いんだけど、目に見えないところで女の人がより早く西洋化を遂げていることの意味を私はこれから考えたいと思っています。あまり女の人の方が西洋への憧れが強かったと一義的に言えないような気もしています。

仏教ですが、仏教がキリスト教の影響を受けたと考えるより、私は、キリスト教が仏教の影響を受けている側面の方が強いような気がしています。数珠とロザリオとか、灌頂と洗礼とか。これはまあ本当に無茶苦茶な与太話ですが、私はキリストの誕生譚に出てくる東方の三博士の内の一人は仏教徒なんじゃないかと思っていますが、まあそんな与太話はやめましょう。ですがシナイ半島からインドの東あたりまでを含めて、あのあたりに何か似通った考え方が出たことはたしかだと思っています。その中で今日に伝わった形の、その内の一つがキリスト教になっている。インドにはゾロアスター教が残っていますし、仏教もそのうちの一つ

なんだと考えています。ただ、日本に伝わった仏教はもはや仏教と言えるようなものではないような気も私はしています。釈迦の考えたことと、今本願寺教団やらが考えていることの間には相当大的な隔たりがあるようには思っています。ちゃんとしたお答えになっているかどうか自信がないのですが、ご容赦下さい。